

南ぬ風

一般財団法人 沖縄美ら島財団

ふえーぬかじ

広報誌

2017.10~12
Vol. 45
秋号



「中秋の宴」の様子。御庭は大変な賑わい。組踊の唱え(セリフ)は日本語と英語の字幕が出るのでわかりやすい。



地謡は歌・三線を中心として笛や箏(こと)、胡弓、太鼓で構成される。



首里城公園内で毎月開催される出前コンサート。琉球古典音楽コースの学生が出演する。

巻頭インタビュー
美ら島をつなぐ
Vol.16



沖縄県立芸術大学 音楽学部 音楽学科
琉球芸能専攻 琉球古典音楽コース准教授

山内昌也

YAMAUCHI MASAYA

文 二のうえちず

小学5年生から三線を弾き始め、琉球新報社主催の琉球古典音楽コンクール新人賞を史上初の中学3年生で受賞。最高賞は20歳で受賞。沖縄県立芸術大学大学院を修了し、2012(平成24)年より現職。県内高校の非常勤講師もつとめる。二流演奏家として精力的に活動。琉球古典音楽野村流音楽協会、琉球古典音楽連水流出保存会の両方で功労賞を受賞。

伝統を継承しつつ
琉球古典音楽の
可能性を広げる

首里城公園で行われる「中秋の宴」や「新春の宴」などのイベントへ沖縄県立芸術大学(以下、県立芸大)の学生を出演させるプロジェクトを行う山内准教授。氏の所属する県立芸大と沖縄美ら島財団(以下、財団)は、2014(平成26)年に「包括的連携協定」を締結し、「首里」を中心としてさらなる連携が期待される。琉球古典音楽の枠組みにとらわれない発想力と、その背景について話を聞いた。

「首里」にしかないホンモノをつくりたい。

—小学校から琉球古典音楽(以下、古典)一筋、長いキャリアですね。

学校のクラブ活動をきっかけに、小学5年生から三線を弾き始めて、30年以上になります。実は将棋クラブに入りたかったのですが、人気があつて入れず、仕方なく三線クラブに入ったんですよ(笑)。

—なじみのない人にとって、古典は敷居の高いイメージがあり、一見さんにはわかりにくそうですね。

古典は、王府の儀礼や冊封使等の賓客を歓待する宮廷音楽として生まれました。ゆるやかな旋律で母音を長く引く張ることが多い古典に対し、沖縄民謡は感情を前に出すため、現代人でも受け入れやすい。例えばカチャーシーなら、音はもちろん、体全体を使つてうれしい・楽しいという感情表現をしますよね。古典は感情を出したい曲こそ、表に出すのではなく「内に秘める」という表現をします。踊りも含めた「古典芸能」というジャンルには、極限まで制約された、動かない美意識がある。そこは沖縄民謡との大きな違いでしょう。

—そう聞くと「内に秘める表現」にも興味が持てますね。

小中学校の音楽の授業に三線を取り入れる先生が増えていきます。民謡は聴き馴染みもあるので弾いて楽しむことができますが、古典の面白さ

を伝えるのはなかなか難しい。そこで私は「全員で『ウー』と歌ってみましょう」から始め、古典の特徴をつかみ、なぜこの音楽が生まれたのかを、ひとつく形にしました。古典、民謡、ポップス、各ジャンルの違いを知った上で、古典つてカッコイイと思つてもらえたら、古典を志す人も増えるのではないかと思います。

—山内さんは演奏家として一般向けの公演も行われていますね。

沖縄県内だけでなく、県外・海外でも公演を行っています。古典は舞踊や「組踊」との関係も重要で「立方」との相性はとても大事となります。立方とは、踊ったり、演じたりする人のことをいいます。対して我々演奏家のことは「地謡」といいます。通常地謡は数名で構成されますが、私が企画した公演では、舞踊立方一名、地謡一名という極限の人数で古典芸能の世界を表現しました。最近では、古典のみを聴くという公演も増えており、とても嬉しいです。

—大学では演奏も指導されると思いますが、他にはどのようなことを教えられるのですか？

県立芸大は日本の国公立大学では5番目にできた芸術大学です。沖縄という個性の美を追求すると共に、世界の普遍的な芸術も学べるようにという考え方があり、音楽学部では

沖縄の音楽だけでなく、西洋音楽も学べます。古典の課題の一つは、立方ありきだった音楽を、音楽単体で芸術にしていこうとします。学問的なレベルや演奏のクオリティが高くなると、ステイタスも上がります。若手が演奏家として活躍できる場をつくることも必要なので、大学院では「創作演習」という科目で、自分たちが演奏する空間をつくるという課題を与えます。2017年の11月には那覇空港で、古典と若衆踊りを披露する「空間」を、学生たち自身がプロデュースするという実習も行う予定です。

—演奏技術では伝統を守りつつ、プロデューサー的な発想ができること、可能性はさらに広がりそうですね。

琉球王国時代の演奏は録音されていないので、当時の演奏を復元することはできません。でも当時の価値観を蘇らせることは可能じゃないかと思えます。例えば、研究の成果に基づいて、首里城北殿前に住時の仮設舞台を再現し、音の通る時間帯に、生音で舞踊や組踊を上演してみようかと。

—首里城公園の「中秋の宴」では組踊が上演されています。現代的な仮設舞台で、大勢の観客に聞こえるような音響設備も使えますね。

住時、実際に造っていた舞台の位置や構造、演目など、研究は進んでいますから、わかっている範囲で、できる

contents

美ら島をつなぐ人	02
おきなわ歳時記	04
魚のふしぎ	05
熱帯植物ずかん	05
調査研究	06
普及啓発	08
海洋文化コラム	09
沖縄の大木	09
運営管理	10
スポットライトの向こう側	12
財団いんふお	14
編集後記	15
おもろさうしの植物	裏表紙

作品タイトル「コキュウノキオク」 沖縄県立博物館・美術館館長賞
「紙をつくるというより、繊維で表現したかった」という本作。素材に選んだのは、沖縄県民にとって身近な植物である月桃。A4サイズぐらいのパーツをつくり、破って縫い合わせるという手法で、平面より空間で表現した。大きさは約6メートルにもなる。「縫っていく過程は自分に向き合う時間。そのテンポは呼吸や心音と重なる」ことがタイトルの由来だ。
沖縄県立芸術大学大学院 造形芸術研究科 絵画専修
玉那覇 真希さん(沖縄県出身)
43号から46号までの1年間は、沖縄県立芸術大学・大学院造形芸術研究科「第28回卒業・修了作品展」で受賞した4作品が表紙を飾ります。若い才能にご注目ください。



—実際の御冠船踊りも限られた人が見ていたわけですし、往時に近い環境で演奏を楽しみたいという人は多いのではないのでしょうか？

組踊や古典舞踊、古典音楽は首里の地から生まれた芸術です。首里に人を呼べる目玉になると思っています。

—県立芸大と財団は包括協定を結びました。協力体制のもと、さらにい

月一度開催する首里城公園での出前コンサートも定着してきました。2016年には財団の設立40周年と、県立芸大の開学30周年を記念して「繋がる芸能」沖縄・台湾・ジャワバリ」と題した特別演奏会を開催しました。今後、50周年、60周年を迎える時、首里というまちがどうなっているかなど考えることがありますが、工芸などモノづくりもですが、音楽や食といったソフトの部分でも、首里だけにしかないホンモノを、共に作り出すことができればいいですね。

※御冠船踊り：冊封使歓迎の宴で披露される芸能(舞踊・組踊)のこと。中国皇帝が派遣した冊封使が乗る船のことを、王冠や王服などの下賜品を乗せてくるところから「御冠船」と呼び、転じて冊封そのものを意味した。(参考：『最新版 沖縄コンパクト事典』2003年、琉球新報社)



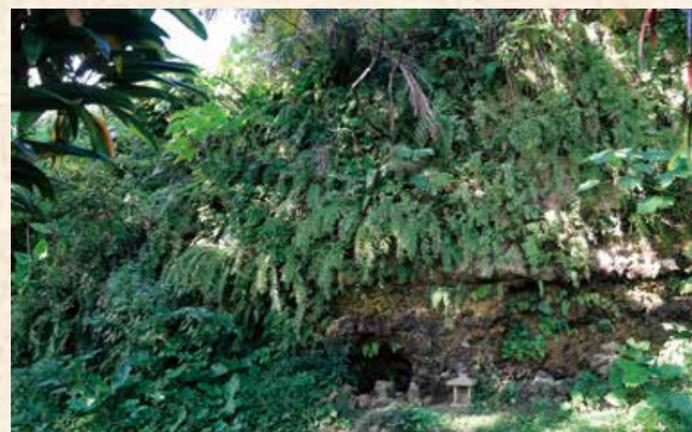
写真はムーチーが5個連結されているので、5歳の子がいるということになる。また、吊るして通気性をよくしておけば数日はもつという実用的な一面も。(写真：小早川渉)

旧暦12月8日は「ムーチー」の日。沖縄では、月桃の葉に包んで蒸した餅を食べ、厄払いとする風習がある。ムーチーとは沖縄の言葉で餅という意味。カーサ(葉)で包むことから「カーサムーチー」とも呼ばれるが、12月8日に食べるムーチーに関しては、「鬼ムーチー」という別名がある。この日にムーチーを食べる由来として、「鬼」が登場する民話があるためだ。

昔、首里金城に兄妹が住んでいた。兄は大里へ引越したが、家畜や人を食べる「大里鬼」になったという噂が流れてきた。妹は真偽を確かめようと大里へ行ったが、どうも噂は本当らしい。そこで、妹は自分用には普通の餅を、兄用には鉄のかたまりを仕込んだ餅を用意し、兄を首里金城へ招いた。「お兄さんの好きなお餅を作りました。景色のいいところで食べましょう」と兄を崖の上に誘い出して、兄には鉄入りの餅を食べさせ、崖から突き落として退治してしまう。その日が12月8日だったことから、沖縄の人は厄払いに餅を作って食べるようになった。

ムーチーは子どもの健やかな成長を願う行事でもある。子どもの年の数だけヒモで連結したムーチーを吊るしたり、赤ちゃんが生まれた家では「初ムーチー」として、ムーチーをたくさん作って親戚やご近所に配るという習慣もある。餅粉を

ムーチー



妹が鬼になった兄を退治した場所だと伝わる、首里金城町の崖。

練って月桃の葉で包むのだが、紅芋味や黒糖味などの餅粉ミックスが市販されるほどポピュラーだ。月桃には殺菌作用もあり、腐敗を防ぐという効果もある。

旧暦12月8日の頃は冷え込むことが多いため、「ムーチーピーサー(餅冷え)」という言葉があるほど、ムーチーの習慣は暮らしの中に定着している。多くのウチナーンチュにとつて、毎年この時期になると「あ、今年も寒いさー。やっぱり旧暦には昔の人の知恵が詰まっているね」と言うことも、恒例となっている。

グルクマは沖縄近海に生息するサバの仲間。マサバやゴマサバに比べ体高があり、全長は40cm程の大きさです。食用となる美味しい魚で、沖縄の方言である『グルクマ』が、そのまま標準和名になったことでも有名です。沖縄本島北部の国頭村から名を取って「クンジャン(国頭)サバ」とも呼ばれ親しまれています。

魚のふしぎ vol.04

『グルクマ』特徴的な摂餌

入っていくのでは、と気になるかもしれませんが、心配ご無用。海水は鰓孔から出して、鰓の一部である櫛状の「鰓耙」という器官を使って、餌だけを濾し取って食べているのです。沖縄美ら海水族館では、ジンベエザメ等の大型魚類の給餌後には、海中に残った餌を食べるため大きく口を開けた数百尾のグルクマの群れを見ることが出来ます。

(村田香)



群れをなすグルクマ



大きく口を開けた摂餌の様子。

熱帯植物ずかん vol.04

～サンタンカ～

科名:アカネ科
学名: *Ixora chinensis* Lam
英名: Chinese ixora

サンタンカ(三丹花)は、沖縄ではサンダンカ(三段花)とも呼ばれ、中国南部、マレーシアを原産とする高さ1m以上になる常緑低木です。開花期間が5月～8月と長いこともあり、一般家庭の庭園木や街路、公園などの緑化木として親しまれています。オオゴショウ、デイゴと並んで沖縄三大名花の一つにもなっており、うるま市、宜野湾市では市花として選定されています。

一般的にサンタンカと呼ばれるものは花弁が丸く、赤や橙色の小さな花がまとまって咲きます。また、葉が小型で分枝性に優れているのも特徴です。花弁の先が尖るコバノサンタンカという品種からは、様々な園芸品種が作出されており、それぞれ花弁の色や葉の形状の変化に富んでいるのが特徴です。他にも濃い赤の花弁が特徴的なサンタンカ'スーパーキング'、芳香のあるニオイサンタンカ等、多くの品種があります。沖縄の夏を彩り、熱帯を彷彿とさせる独自の美しさが魅力的な花木です。(仲松 辰弥)



サンタンカ・キネシス



スーパーキング



コバノサンタンカ

国立故宮博物院に残る清国と琉球の朝貢国の外交文書を刊行

■ 発刊の経緯

沖縄美ら島財団総合研究センターでは、国立故宮博物院に所蔵されている清朝時代の外国関係の檔案（公文書）に関する史料集を出版するため、同博物院へ研究助成を行い、2015年から2016年にかけて『清代中琉関係史料彙編 宮中檔硃批奏摺』（上下巻）と『清代中琉関係史料彙編 軍機處檔案奏摺録副』（上下巻）を刊行しました。

本史料は、首里城を中心とした琉球王国の、海外交易の様子を垣間見ることができる内容となっています。

刊行にあたっては、国立故宮博物院と交流のある国立大学法人琉球大学の赤嶺守教授にご協力頂きました。2012年に国立故宮博物院長と面談、本事業の意義や概要を説明し、出版の協力を要請、同博物院に残る檔案資料から琉球関係史料を抜き出し、原文と翻刻文（草書体から楷書体にした文）の史料集としてまとめました。

本史料は、沖縄県が実施している琉球王国では失われた『歴代宝案』の校訂本作成事業をサポートする重要な史料となることが期待されます。

■ 失われた『歴代宝案』

『歴代宝案』とは、1424年（1867年（永楽13年）同治6年）までの約440年間に渡り、琉球王国の外交文書をまとめた膨大な史料群のことです。本資料群は二組作成され、一組は首里城、もう一組は久米村という外交文書の作成や進貢貿易業務に従事した者が多く居住した集落にて保管されていました。1879（明治12年）年に琉球王国が滅亡した後は、首里城で保管していた『歴代宝案』は日本に移され、1923（大正12年）年の関東大震災で焼失したと言われています。一方、久米村に残されたものは、日本政府に接収されることを恐れ、長く久米村の中で秘蔵されていました。後に沖縄県立図書館に保管されましたが、残念なことに先の大戦で行方不明となっています。

現在は鎌倉芳太郎氏[※]が撮影した青写真や、国立台湾大学に残されていた写本等をもとに、1989年（平成元年）より沖縄県が歴代宝案編集事業を行っています。

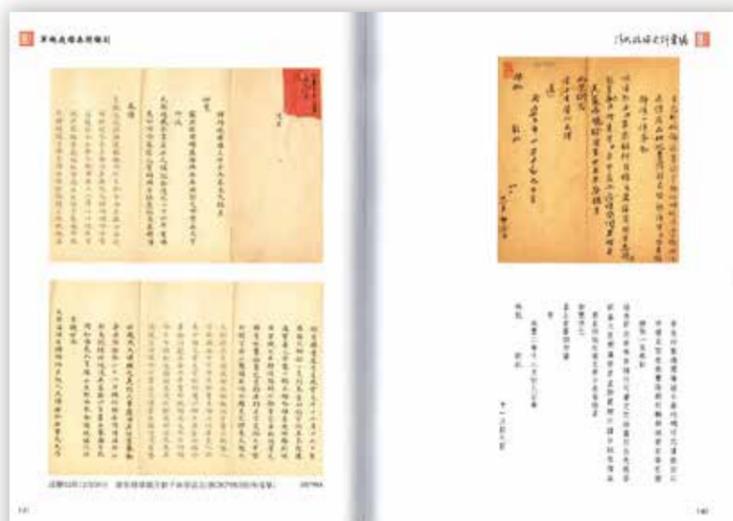
■ 新たな事実

国立故宮博物院の檔案史料には、さらには大学生、大学院生等、若い研究者育成の下地として意義のあるものです。

本史料を活用した研究が進むことにより新たな事実が解明されれば、首里城公園の展示や行催事などへの活用や、新たな観光資源となることが期待されます。



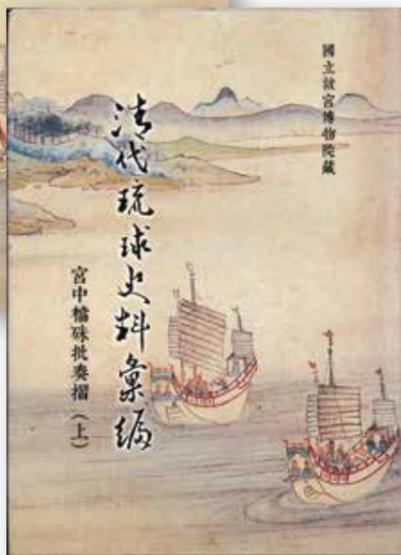
国立故宮博物院との打ち合わせの様子



『清代中琉関係史料彙編 軍機處檔案奏摺録』の本文。17世紀半ばにキリスト教宣教師として来琉したベッテルハイムについての記述が確認できる



『清代中琉関係史料彙編 軍機處檔案奏摺録副』（上下巻）



『清代中琉関係史料彙編 宮中檔硃批奏摺』（上下巻）

『歴代宝案』には残っていない琉球側の記録もあり、新たな事実も分かってきます。

例えば、冊封使が中国から沖縄に来る場合、どのようにして船を選定したのが、今回の檔案史料集の刊行で初めて分かりました。中国から琉球までの航海は琉球側の船頭に任せられるため、福建省の役人は、冊封使を迎えに来た琉球側の船乗りとともに候補となる船の選定をしたことが掲載されています。皇帝の勅使として命を懸けて琉球に渡ってきた冊封使で亡くなった人がいないのは、このような背景があったからかもしれません。

このように清朝側の行政史料から、新たな視点での調査研究の可能性を拡げることができます。

■ 楷書体

また檔案史料は、草書体で崩して書いた文書も多数あり、専門的な研究者でも解読困難でしたが、刊行した史料集は国立故宮博物院の研究者が楷書体に直し、読みやすくなっています。そのため、今後琉中関係史を研究する基礎史料として、また清朝視点という新たな史料として、

沖縄美ら島財団では今後も琉球王国の研究の基礎史料の裾野を広げ、日本国内・海外での研究に寄与していきます。

（安里成哉）

[※]明治31年香川県生まれ、大正10年に沖縄県女子師範学校及び第一高等女学校に赴任したのをきっかけに、大正、昭和期の沖縄を研究したスケッチや古写真、それらの考察は戦前の沖縄の風俗・建築や美術工芸を知る上で貴重な資料となっている。



37種の体験キットを展開

沖縄県立博物館・美術館には、ふれあい体験室という展示スペースがあります。ここでは「先人の知恵と自然のしくみ」をコンセプトとし、博物館常設展示室と連動した内容で、様々な分野のオリジナルハンズオンキットを展開しています。土器や貝、紬や芭蕉布などの実物資料の他、グスクの石積み技術や沖縄の島コトバなどを学ぶことができるキットが全37種類あります。「ハンズオン」とは、自分の手を置く＝触れてみるという意味で、じかにキットに触れて、五感に働きかけることで、関心や理解を向上させるねらいがあります。

来場者も幅広く、県内外のみならず外国のお客様にも喜ばれており、先日は国立大学法人琉球大学の留学生が着物の着衣体験を通して、沖縄の織りの文化を肌で感じていました。また子供たちも「ふれたいシート（ワークシート）」にチャレンジしながら、疑問を抱き、その答えを知ったときの感動を味わっているようで、自分が発見したことをご家族の方に説

明している様子も見られます。2016年には、博物館だけでなく美術館でも、沖縄の文化や沖縄出身・在住の美術家の作品にふれるキットを製作し、期間限定で展開しました。これらのキットは「ざらざら」「ふにふに」「ゴツゴツ」などのテクスチャーを触って感じる仕様ではなく「くつつける」「積む」などして完成させるもののほか、点字が付いているものもあり、バリアフリーにも対応しています。

2017年10月21・22日には、開館10周年イベントとして博物館・美術館連携企画「ハンズオンキットがやってくる！」を開催します。博物館・美術館のすべてのキットのほか、県外の博物館から沖縄や琉球王国にゆかりのある貝製品キットなどをお借りし、沖縄との共通点・相違点を見つけて楽しむことを目的としています。今後も博物館・美術館では、誰もが気軽に楽しめる空間作りを目指していきます。

(大瀧萌子)



留学生による着衣体験のようす



「御三味(ウサンミ)」(重箱料理のこ)を詰める体験キット

御城物語

うぐしくものがたり Vol.15

かつて、首里の人々が「御城(うぐしく)」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関するトリビアを語る歴史エッセイ。

広福門

守礼門を抜けて正殿に向けて歩を進めると、歓会門から数えて4つ目に「広福門」があります。俗に「長御門」「中御門」とも呼ばれ、創建年不明です。門の外壁上部にある扁額には「廣福」とあり、「福を歩き渡らせる」ことを意味します。建物そのものに門の機能を持たせた、建物付帯型門で、首里城の城門の特徴的な形式のひとつです。門の西側には、神社仏閣にかかわる「寺社座」、東側には戸籍を扱い財産争いなどを調停する「大与座」という二つの役所が置かれていました。

かつては士族の家に子が誕生すると、7日以内に大与座へ「生子証文」(出生証明)の提出が義務付けられていましたが、書類作成の手間などもあって、1年から数年ほ

ど提出が遅れることがあったようです。田舎下りした士族(居住人)ともなると、10年から20年ほど遅れるのも珍しくなかったとか。広福門は明治の末頃、小学校が造られるにもなっても取り壊されました。そのため内部の構造については未だ不明のままです。しかし、手がかりとなる貴重な古写真や絵図に描かれた平面略図、発掘調査などの分析をもとに、1992(平成4)年に木造による外観の復元が完成しました。現在は、西側を御手洗、東側を券売所として利用しています。

また、門前の広場からは、弁財天堂や沖縄県立芸術大学などが一望できます。ぜひ現在の首里の眺望もあわせてお楽しみください。

(輝 広志)

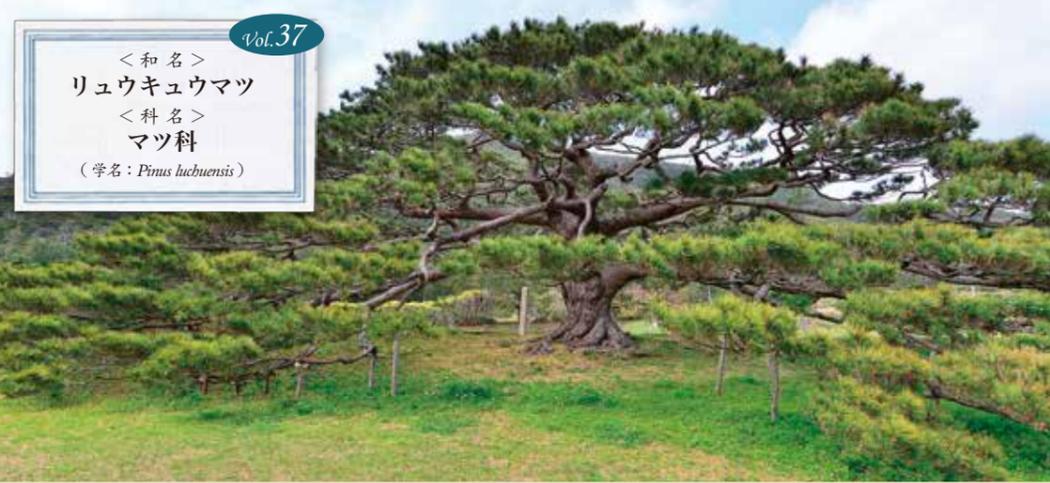


広福門



広福門からの眺望(一部)

沖繩の大木



Vol.37
 <和名>
 リウキュウマツ
 <科名>
 マツ科
 (学名: Pinus luchuensis)

沖縄本島北西部に位置する、伊平屋島の前泊港から北へ約10分車を走らせると見えるのが「念頭平松公園」です。その名も「念頭平松」と呼ばれるリュウキュウマツの原木がシンボルとなっている公園です。リュウキュウマツはマツ科の常緑針葉樹で、風や潮に強く乾燥にも耐え、樹姿も美しいことから、県内においては街路樹や公園樹として広く利用されている木です。通常、枝はあまり大きく横に張り出しませんが、この念頭平松は、太い幹を中心に四方八方に枝を大きく広げており、その姿はまるで小山のようです。幹周りは4m、高さ8m、幅は28mもあり、勇壮なその姿には圧倒されます。念頭平松は、1700年代に植えられたとされていますが、それ以前に同じような平松があり、これを隣の伊是名島の役人が盗伐したところ、その祟りで死んでしまいました。お詫びにと親類の者が植えたマツがこの念頭平松との伝承があります。1958年琉球政府指定の天然記念物となり、2016年3月には国指定の天然記念物に指定されました。

念頭平松のある公園の周囲は現在農地となっていますが、1955年頃までは集落があり人の往来も多く、古くから住民に親しまれていました。現在は公園となり、周りを柵で囲い保護されています。また、伊平屋島には松枯れ病の原因となる線虫を媒介するマツノマダラカミキリが確認されていることから、松の苗木や材の持ち込み等を禁止して保護しています。島の人々に守られ、いつまでも勇壮な姿を見せてくれること

(篠原礼乃)

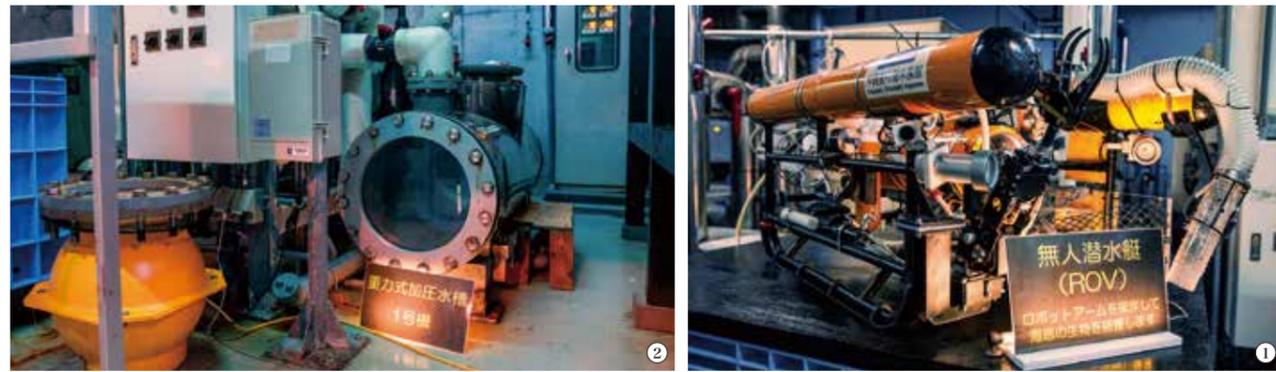
水族館の「見どころ」は、
スタッフの腕の見せどころでもある

飼育員の工夫から生まれる
沖縄美ら海水族館ならではの展示手法

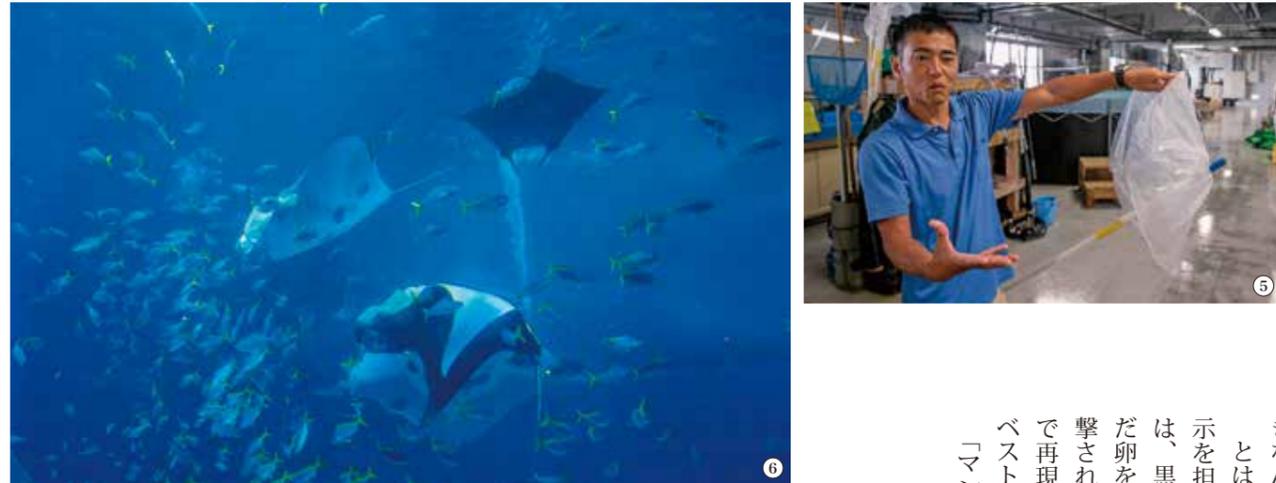


光が届かない環境を再現した、深海への旅エリアの水槽。

深海魚を飼育する。 特許技術がそれを可能にした。



- ①無人潜水艇 ROV
- ②重力式加圧水槽 1号機。
- ③深海への旅エリアの展示を担当する金子篤史主任技師
- ④重力式加圧水槽。2号機は大きめサイズ。
- ⑤傘状のビニールでオキアミを包み、水中でパッと開くマンタのエサやりの際に使用する道具の仕組みを説明する松崎章平主任技師
- ⑥グルグルと宙返りをするように回転するマンタ。
- ⑦2017年7月15日に展示デビューしたばかりのアカタマガシラ。目元が黄色に光るのが特長
- ⑧ROVで捕獲されたコトクラゲ
- ⑨左はオキナワクルマダイ、右はクルマダイ。重力式加圧水槽によって展示できるようになった。



食べるには、効率的でムダがない動きを必要とします。

とは、同じく魚類チームで飼育展示を担当する松崎章平主任技師。実は、黒潮の海水槽でも他の魚が産んだ卵を回転して食べる姿は時おり目撃されていたため、これをエサやりで再現できないかと魚類チームではベストな給餌方法を探ったという。

「マンタが回転してエサを食べる

様子を見られるのは、日本では当館しかありません。午後のエサやりではジンベエザメが主役になるため、マンタの回転給餌は朝にしか観られません。自然に近いマンタの摂餌シーンを、少しでも多くの方にご覧いただければと思います。」

現場のアイデアから見どころをつくる工夫は、まだ続きそうです。
(文：いのうえちず)

沖縄美ら海水族館、深海への旅エリアでは、2017年夏からROV（無人潜水艇）と重力式加圧水槽の展示を始めた。

「ROVの導入後は、カメラで観察することで、深海の環境や生態がわかるようになりました」

とは水族館事業部魚類チームの新規展示を担当する金子篤史主任技師。ROVにはスラップガンという吸引器があり、小さな生き物や柔らかい生き物を吸引して捕獲することも可能だ。その成果として展示されているのがコトクラゲだという。

一方、重力式加圧水槽は、深海への旅エリアで30種類の魚を展示することを可能にした立役者だ。

「深海に生息する魚は、水面まで引き揚げると、血液中のガスが気泡になったり、目が飛び出したりします。そこで潜水病（加圧や減圧による障害）の人間を治療するチャンバー（高気圧酸素治療装置）と同じようなものを作れないかというのが出発点でした」

この重力式加圧水槽は、沖縄美ら島財団が物理的な原理を応用した構造で特許を取得している。簡単に言えば、水槽の上に高さ18メートルの管をつけ、水で満たして水槽の中に

水深18メートル分の水圧をかける。機械的な加圧ではないのが特徴で、停電にも強い。減圧症の魚をこの重力式加圧水槽で治療することができるようになるというのだ。

「すべての深海魚が飼育可能になるわけではありません。それでも、少しずつ実験を繰り返して30種まで展示を増やせました。単純だけど、誰も考えつかなかったアイデア。世界中どこもやっていないことなんですよ」

この重力式加圧水槽は水族館の職員が、ホームセンターで売っている資材を組み合わせて、試験をくり返したものだという。また、2017年11月からは深海エリアの生き物の生態を学ぶことのできるインタラクティブ映像を映す「タップトーク」も計画中とのこと。

沖縄美ら海水族館には、飼育員ならではの発想で生まれた新しい展示がもう一つある。2017年5月から始まった、毎朝9時半のマンタのエサやりだ。

「マンタは生後1週間で、体をグルグルと回転させてエサを食べ始めます。動物プランクトンなどを

沖縄県立美術館の活動をサポートするNPO法人happy。happyとはスカンジナビア語で幸運という意味で、「art(芸術)を身近に感じられる活動を通して、それぞれの幸運な出会いがある場を皆さんと一緒に作っていきたい」という願いが込められているそう。英語ではhappiness(幸せ)やhappening(出来事)、art(アート)、people(人々)とplace(場所)という意味も。その活動について大館理事長に話を聞いた。

—設立から何年になりますか？
大館「2005(平成17)年8月にNPO認定を受けたので、もう13年目になりますね」
—沖縄県立博物館・美術館の開館(以下、県立博物館・美術館)が2007年11月。開館準備の段階からサポートされていたんですね。

NPO法人
沖縄県立美術館支援会
happy理事長
大館 義則 おおか よしのり



大館「そうですね。現在、一般会員は70名、理事は12名ですが、全員が手弁当のボランティアです。いろんな職種の人がいて、それぞれの専門分野を活かして動いてくれますから助かっています」

—活動も多岐にわたっていますね。
大館「新都心のコミュニティラジオ局、FMレキオで第1、第3金曜日の午後2時から『ハッピー・ステッ

の企画の良かったところは、協力店舗の皆さんが率先して参加してくれたこと。それにMAP自体が大人気で、近くのショッピングモールに置くことなくになりました」
—地域と美術館をつなぐ役割も担っているんですね。

大館「地域にちゃんと根づいて、地域とコミュニケーションをとれる我々ができるのは、こういうことかなと思います。他にも、5月、8月の第二金曜日は夕方6時半から3時間ほど、おもしろまち駅から新都心公園までをつなぐ水の道公園でワイワイと夜のピクニックを楽しむイベント『夜ピク』に参加したり。2017年7月にはhappyの理事が傘を使ったプロジェクト「シヨンマッピング」を行って、幻想的な、いい雰囲気でしたね」
—それも楽しそうですね。

大館「地域も巻き込んで、とにかく人の流れをつくるということをすれば、美術館がもつとにぎやかに、人の集まる場所になっていくと思うんです」
—happyの理事長として、指定管理者である沖縄美ら島財団に望むことはありますか？

大館「実は新都心の小学校区には



紙ヒコーキ大会の様子

大館「2016年は初の試みとして『Oh My MAP』という新都心のまちまい(まち巡り)MAPを沖縄美ら島財団と一緒に作りました。新都心地区のお店に協力してもらい、各店舗に『福の神』をモチーフにしたオブジェを置いて、マップを元にそれを探してケータイで写真を撮るといいます。面白いMAPです。特典を用意してくれる店舗もありますし、県立博物館・美術館の観覧料優待券がもらえたり、特製ポストカードがもらえたりというオマケつきで、これが大好評！」
—それもまた楽しい企画ですね。
大館「2017年度もぜひ規模を拡大してやりたいと思っています。こ

プ・ジャンプ』という番組を放送しています。50分番組ですが、正味35分の中に、毎回県立博物館・美術館の宣伝を入れて、いかに集客につなげるかを考えています」
—それは心強いですね。

大館「happyの活動基本理念としては、①文化創造活動に参加できる機会を広く提供する芸術鑑賞、芸術体験プログラムを行う。②地域に根ざした美術館づくりに寄与するために周辺地域との連携を図る。③沖縄県内外でのアートを通じたネットワークの構築を図る、という3つがあります。①に基づいた活動では、アートを見ながらおしゃべりを楽しむ対話型の鑑賞ツアー『ゆんたくミュージアムツアー』が好評です。最近始めたのが沖縄県難聴・中途失聴者協会と一緒に開催した中途難聴者と一緒に美術館を回る『ゆんたくミュージアムツアー』です。タブレットやスマートフォンで言葉や文字変換できる音声認識アプリや、イヤフォンを付けてもらい、直接マイクで会話をしながら作品を鑑賞します。このツアーは毎月1回は実施したいと思っています。ゆくゆくは健常者の方々と一緒に開催で

児童保育が少ないのが現状です。安全管理上の問題もあるかと思いますが、せめて夏休みの間だけでも、ロビーのすみっこに自由に使える机とイスがあって、子どもたちが宿題でもできるような居場所を作ってほしい。新都心に住んでいる子どもたちには歩いてこられる施設ですし、何より博物館や美術館に足を運ぶ習慣を身に付けさせることは、彼らが大人になってからもきつと役立つと思います」
—地域との連携を考えるhappyならではの発想ですね。

大館「もうひとつは、インバウンド対策です。2030年には年間約1700万人が沖縄を訪れるという沖縄観光コンベンションビューローの予測値(※)が出ています。そのうち半分は海外の人だと言われている。また、2020年の東京五輪は真夏の開催で、その前に



大好評だった Oh My MAP

ければ最高ですね。ITの力を使ったらこういう取り組みを沖縄から発信できれば、全国の人にも刺激になるはずですよ」
—それは素晴らしい試みですね。他にどんな活動がありますか？

大館「2カ月に一回、機関紙を発行したり、子ども向けワークショップを開催したり、2017年で6回目になりますが、那覇紙ヒコーキ大会を開催したり…」
—紙ヒコーキの競技ですか？
大館「これは活動基本理念の②に該当する、地域との連携ですね。近隣の小学校に呼びかけて、各校の予選を勝ち抜いた代表者を出してもらって、学年別に飛距離を競います。happyからはデザイン賞を用意するんですよ。新都心公園で開催しますが、飛び入りで参加できるコーナーもありました。楽しめるイベントになりました。2013年には、地域の人たちも参加して、災害時の炊き出し訓練も一緒に行ったんですよ。沖縄県立芸術大学の学生と子どもが、お互いの似顔絵を描くコーナーがあったり、1日楽しく遊べます」
—地域を巻き込んだイベントは楽しそうですね。



ゆんたくミュージアムツアーの様子

沖縄で調整をするアスリートが出てくるはず。彼らの関係者もあわせて来るでしょうし、メディアや彼らを見に来るファンもいる。その外国人たちのために、多言語化も進めないといけません。現実に近い夢を話すとキリがありませんが、今後とも、沖縄美ら島財団とは同じ方向を向いてやっていければいいなと思います」
(文＝いのうえちす)

※参考：(一財) 沖縄観光コンベンションビューローウェブサイトメディアリリース「OCVB 2030年度までの沖縄入城客数見通し」

平成29年度助成事業の対象が決定しました

沖縄美ら島財団では、平成29年度より亜熱帯性動植物および歴史文化等に関する調査研究・技術開発並びに普及啓発活動を行う個人、団体に対して、研究活動費の助成を行っています。

平成29年度は28件の応募をいただき、厳選なる審査の結果、6件が採択されました。本助成事業が、各分野における事業の一助となることを期待します。



対象者	対象者
亜熱帯性動物に関する調査研究・技術開発	対象者
アオウミガメの餌嗜好性に関するバイオロギング研究	亀田 和成 NPO 法人日本ウミガメ協議会付属黒島研究所 主任研究員
沖縄島北部座津武川上流における溪流性カエル類の生態的研究	千木良 芳範 宜野湾市立博物館 館長
慶良間諸島座間味島におけるウミガメ類の上陸・産卵および孵化率調査	安里 瞳 国立大学法人 琉球大学 ウミガメ研究会ちゅらがーみー副会長 兼 座間味調査担当
亜熱帯性植物に関する調査研究・技術開発	対象者
沖縄に自生するホンパワダン(ニガナ)の多様性調査と活用に向けた研究	齊藤 由紀子 国立大学法人 琉球大学 教育学部 准教授
ヒト臍帯静脈血管内皮細胞におけるeNOS mRNA 発現に対するシークワサーの効果	砂川 昌範 公立大学法人 名城大学 人間健康学部 人間健康学部長
歴史文化に関する調査研究・技術開発	対象者
琉球王国の茶道具と茶文化の研究 —首里城出土の天目茶碗と宜興窯紫砂壺を中心に—	森 達也 沖縄県立芸術大学 美術工芸学部 教授

国立大学法人琉球大学、一般財団法人沖縄美ら島財団、竹富町及び竹富町商工会との包括連携協定を締結

2017年7月10日、石垣市内において「国立大学法人琉球大学、一般財団法人沖縄美ら島財団、竹富町及び竹富町商工会との包括連携協定」の締結式が執り行われました。

本協定は、4者が相互に密接な連携協力を図り、創造性のあるまちづくり、地域産業の振興、学術研究の発展、これらを担う人材育成に寄与することを目的としています。



(左から)竹富町 西大外高旬町長、琉球大学 大城肇学長、沖縄美ら島財団 花城良廣理事長、竹富町商工会 上勢頭保会長

締結式の後は、川嶋辰彦学習院大学名誉教授による記念講演が行われ「今回の締結は4者となっているが、そこに一般市民を加えた5者で施策を進めていくことが重要」と連携事業の発展への助言をいただきました。

今後、沖縄美ら島財団では協定に伴う事業の一環として、西表島における希少植物、サンゴ・サメ類等の海洋生物に関する調査研究事業推進のため、西表島に総合研究センターの支所を設置する予定です。また、産業振興、出張授業等の普及啓発、人材育成事業を行い地域貢献に取り組んでまいります。



川嶋名誉教授による記念講演

全長約9m、実物大の「ウバザメ」を展示!



「ウバザメ」は、ジンベエザメに匹敵するほどの大きさになるサメです。性格はおとなしく、プランクトンを食べて生活しています。沖縄美ら島財団では、実物大レプリカを製作し企画展等において展示を行っています。2017年7月〜8月は、沖縄県立博物館・美術館の企画展にて展示を行いました。2017年10月からは、海洋博公園美ら海プラザにて展示を予定しています。

世界においても生体展示が難しいとされる「ウバザメ」の実物大レプリカを見られる貴重な機会です。皆さまぜひお越しください。

ジンベエザメ立体花壇が那覇新都心に登場



沖縄美ら島財団が沖縄県立博物館・美術館の指定管理者となつて以降、「ヤンバルクイナ」「ノグチゲラ」と沖縄らしい生き物をモチーフにした花壇で入口の賑わいを演出してきましたが、この度、沖縄美ら水族館の開館15周年を記念して「ジンベエザメ」を新たに設置しました。同館の「看板ザメ」として連日やってくる多くの県民や観光客の皆さまをお迎えしています。

今後も沖縄美ら島財団のノウハウを活用し、どなたでも行きたくなるような、親しみやすい施設運営を心がけてまいります。

沖縄美ら島財団理事長 花城良廣が 沖縄県観光功労者として表彰されました



(前列左から)安里 清氏、上地 敏夫氏、宜寿次 均氏、永山 潔氏、花城 良廣、松田 美貴氏。

2017年8月1日「めんそーれ沖縄県民運動推進協議会 総会・表彰式」が開催され、当財団理事長 花城良廣が平成29年度の沖縄県観光功労者として表彰されました。

受賞理由としては、「沖縄国際洋蘭博覧会」の開催、「アジア太平洋洋蘭会議・蘭展」の沖縄誘致、海洋博公園・首里城公園の高度な管理運営をはじめ、観光客の誘客のため、国内外での積極的な広報宣伝などの実績が認められたことによるものです。

花城とともに、安里清氏(株)名護パイン園代表取締役会長兼社長CEO・上地敏夫氏(多幸山株式会社(琉球村)代表取締役)・宜寿次均氏(那覇大綱挽保存会副会長)・永山潔氏(首里振興会理事長)・松田美貴氏(有)沖縄シブスエージエンシー代表取締役会長)が表彰されました。

これからも沖縄美ら島財団では沖縄県の観光振興に寄与して参ります。

後編 編集集

深海に生きる魚たちを展示する。その裏側を覗くことが出来たのは貴重な体験となりました。沖縄美ら水族館では開館15周年企画として「深海」に焦点をあてています。この機会に深海の世界にどっさりハマってみてはいかがでしょうか?
(編集事務局SK)

おもろさうしの

植物

其の十

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内おもろ植物園で見ることが出来ます。

〔せりこ〕

(シチトウイ)

一 なよくらののろの

あま 富み

かまへ 貢 積で みおやせ

又 若のろわ 勝り

又 綾の筵 打ちよちへ

又 せりこ 乞うて 打ちよちへ

「第一三巻七七七」

なよくら神女が守護する

歡へ富(船名)が

貢物を積んできて国王に奉れ

若のろ神女は勝れていて

美しい筵を織り給いて

蘭草を乞うて織り給いて

(国王のためのお祝いをしよう)

「解説」

なよくら神女が守護する歡へ富船が、貢納物を積んできて国王様に献上せよ。若のろ神女は勝れていて、守護する歡へ富船が、貢納物を積んできて国王様に献上せよ。美しい筵を織り給いて、蘭草を求めて織り給いて、国王のための言(ことば)祝(いわ)ぎをしよう。

「あまへとみ」は、船名。歡へ富。「せりこ」は、植物名。蘭草。茎を筵または畳表とする。方言ではイーという。

歡へ富船が積んできた貢納物も、織りあげた美しい筵も、すべて国王様のめでたいお祝いのためなのだ、と謡ったオモロ。

一口メモ

シチトウイは水辺の湿地に生える多年生草本で、根元から1〜2メートル程の茎が直立して生じ、茎が三角形になっているので「三角蘭(さんかくい)」という名がついている。また、薩南七島で栽培されていることから「七島蘭(シチトウイとも呼ばれる。中国南部、フィリピン、インドシナに自生し、関西地方から琉球の各島に栽培または帰化している。畳表(たたみ)・花筵(はなむしろ)などに利用される。元々は琉球で栽培されていたが、江戸初期に薩南を経て大分県に伝来されたといわれる。そのことからこの植物でおられた畳表のことを「琉球表」と呼ぶようになった。



おもろさうし
和名 シチトウイ
科名 カヤツリグサ科
方言名 イー・サチー・サーラ

※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

沖縄美ら島財団



沖縄美ら島財団
総合研究センター



海洋博公園



首里城公園



美ら島
自然学校



当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

美らなる島の輝きを御万人へ

沖縄美ら海水族館



沖縄県立
名護青少年の家



なご
アグリパーク



沖縄県立博物館・
美術館



2017年10月発行

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌

企画・編集・発行

一般財団法人

沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888
TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

季刊誌 南ぬ風 秋号 vol.45
2017.10~12

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷 〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5 TEL.098-995-4444

ISSN 2189-4140